2012 奈良県立医科大学 和歌山県立医科大学

学生災害ボランティア 生活復興支援活動

活動報告

1　概　要

奈良県立医科大学学生 14 名、和歌山県立医科大学学生８名の計 22 名が、平成 24 年８月 19 日（日）～８月 24 日（金）の間、福島県内を訪問し、ボランティア活動や災害医療セミナーなどに参加し、福島の現状や被災した状況、災害医療、放射線に関する事項などについて理解を深め、ボランティアとしての活動を通して現地の人の生の声を聞くとともに、今後も支援や広報などを継続する必要があることを認識した。

福島医大生と郡山市仮設住宅にて

福島県庁では県の担当者から除染、福島の観光、食の安全について講話を受けた。福島県南相馬市で社会福祉協議会が行っている仮設サロンに参加、郡山市では福島県と福島県立医科大学が共同で実施している県民健康管理調査の支援活動を行った。

2　活動内容、成果、問題点など

（１）福島県庁での講話受け（20 日午前）

福島県庁知事直轄広報室の取り計らいにより、福島の現状や今後の施策などについて説明いただいた。除染作業、食の安全を確保するための施策、福島の観光地と震災後の観光客の変化などについて説明を受けた。また、普段は入ることのできない福島県災害対策本部を見学させてもらえた。震災で立ち上がって以来、原発事故対応のため閉鎖されていない災害対策本部の状況や、発災直後医療班が活動したスペースなどについて説明を受けた。

（２）福島災害医療セミナーへの参加（20 日午後～21 日）

福島県立医科大学災害医療総合学習センター、FukushimaWill が主催し、国立病院機構災害医療センターが協働して開催された医学生、看護学生向けの福島災害医療セミナーに参加し、災害医療や東日本大震災、放射線と放射能、チェルノブイリで得られた所見などの講義や、放射線測定、トリアージと傷病者対応、緊急ひばく医療などの実習を受けた。

緊急ひばく医療実習

20 日夜には福島県青少年会館において懇親会を実施、奈良県立医科大学、和歌山県立医科大学、福島県立医科大学、東京医科歯科大学、筑波大学の医学生、看護学生と、福島県立医科大学の教職員、災害医療センターの医師が参加し、親睦を深めた。

（３）仮設サロンでの傾聴活動、及び子どもとの交流（22 日）

22 名が３グループに分かれ、午前３ヶ所、午後３ヶ所の延べ６ヶ所の仮設サロンに参加した。

参加学生からは「サロンに集まる人は思っていたより元気そうだった。」、「医師看護師には言えないことも話してくれて、学生としての役割を果たせた。」、「学生がいるからサロンに来たという人もいて、ボランティアの特長を生かせた。」という感想があり一定の成果は得られたが、「サロンに来られない人に対する対応も考える必要がある。」といった今後活動を続けるうえでの解決すべき課題も指摘された。

（４）地震及び津波被災地の視察（22 日夕）

南相馬市での仮設サロンでの活動後、南相馬市小高（おだか）区と相馬市松川浦を視察した。小高区は福島第１原発の 20km 圏内であり、４月に警戒区域・計画的避難区域が解除され避難指示解除準備区域に指定された地域である。この区域からの屋外にある物品の持ち出し・処分は制限されているため、津波被害に遭った車や家屋がそのまま残置されていて、道路や家屋の周りの草木は生い茂ったままで、復旧があまり進んでいない状況であった。津波による被害を初めて目の当たりにした学生にとっては衝撃的な光景であった。前回の参加者にとっても、1 年前に目にした 23 年夏の鹿島区（小高区の北に隣接する地域）よりも放置されている車や家屋が多い光景に、復興どころか復旧も進まず災害が現在進行形であることを認識させられた。

（５）県民健康管理調査の支援活動（23 日）

福島県立医科大学医療人育成支援センター大谷晃司准教授に調整していただき、福島県と福島県立医科大学が共同で実施している県民健康調査の支援活動を行った。郡山市ビックパレットに隣接する仮設住宅において、川内町などから避難してきている住民に対して問診票の配布、記入支援、回収を福島県立医科大学生７名とともに４人１組､計８組で行った。

参加学生にとっては、アンケートの記入支援などを通じて避難住民の生の声を聞き、避難時や避難生活のつらさや不満を感じることができた。

活動終了後には、参加学生が担当職員とともに振り返りを行った。回収率を上げる方法、回収済みの人に対する二重訪問の防止策などについて話し合い、職員の方に提案を行った。福島県が行う行政サービスに参加し問題点をみつけて解決策を提案するという一連の流れを実践し、医療と行政との密接な関係について認識することができた。

（６）その他

23 日午後、会津若松市の野口英世記念館を見学した。黄熱病をはじめとする多くの感染症の研究に携わった野口英世に関する展示資料にふれ、医学科・看護学科学生としていかにあるべきかを考える機会となった。

また、「志を得ざれば再び此地を踏まず」という生家の柱に刻まれた文字をみて、野口英世の志の高さに感服した。

野口英世記念館

３　今後の活動

（１）奈良県立医科大学大学祭での広報

奈良県立医科大学の大学祭である白橿生（かしふ）祭において昨年と同様、現地での活動内容、現地の状況について、写真展示により広報を行う。また、シンポジウムにおいて、今回の活動の報告を行う。

（２）東日本大震災追悼行事

25 年 3 月 11 日頃に追悼行事を行う。日時・内容・場所は未定。

（３）学生災害ボランティアバスの継続的な実施

平成 25 年度も引き続き学生災害ボランティアバスを企画・実施する。

４　参加学生

（１）奈良県立医科大学参加学生 14 名（医学科 6 名、看護学科 8 名）

（２）和歌山県立医科大学参加学生　８名（医学科 5 名、看護学科 1 名、看護大学院 2 名）

５　協力機関・団体等

国立病院機構 災害医療センター（臨床研究部、ＤＭＡＴ事務局）

福島県 知事直轄広報室

福島県立医科大学 医療人育成・支援センター

福島県立医科大学 災害医療総合学習センター

南相馬市社会福祉協議会 生活復興ボランティアセンター

Fukushima Will （福島県立医科大学学生ボランティアサークル）

和歌山ＮＰＯセンター